帰国報告

～バンコク日本人学校で感じたこと～

周南市立桜木小学校　　教諭　　高見　直弘
派遣先在外教育施設名　バンコク日本人学校

１　タイはこんなところ

ワット（寺）

タイは東南アジアに位置し、人口は 7000 万人弱（世界 20 位）、面積は約 50 万ｋ㎡（世界 50 位）、宗教は 95 パーセントが仏教、通過はバーツ（1 バーツ約 3.5 円）、首都は日本人学校のあるバンコクである。王様が治める国（タイ王国）であり、BTS（高架鉄道）・MRT（地下鉄）などの交通機関では朝と夕の 1 日 2 回、国王讃歌が流れる。バンコク日本人学校はタイの私立学校という位置づけでもあるため、運動会や入学式などの学校行事では、日本国国歌とともに国王讃歌も流れる。

私が派遣された当時（2016 年）、国王はプミポン国王であったが、その年の 10 月に「国王様御崩御」のニュースが世界中に流れた。当時、世界最長の在位を誇ったプミポン国王は、現在のタイの安定を気付いた偉大な国王として、国民からの絶大なる信頼と尊敬を集めていた。派遣教員はその国の環境に慣れることが大切だと思うが、この国王が亡くなった時ほどタイらしさを感じた出来事はなかった。街の様子が一変し、明るく賑やかなバンコク都内は、人の服装も建物の装飾も全てモノトーンになり、街にあふれていた音楽は消え、あらゆるところに国王陛下を偲ぶ写真と花が飾られた。約 1 年の間、タイ全土が悲しみに包まれているのを肌で感じた。

タイの気候は熱帯に分類され、年中高温である。3 月から 5 月ぐらいが最も暑い時期で、日中は 40 度を超えることもある。日本なら外に出るのも危険なレベルだが、そんな中でも運動場で体育の授業があり、休み時間は外で元気に遊ぶ。水泳の授業は年間を通して実施される。6 月から 10 月くらいまでは雨季とされ、激しい雨と雷が毎日のようにある。1 時間ぐらいで止むことが多いが、そのすさまじい雨と雷には恐ろしさを感じることもあった。一方、乾季にはほとんど雨が降らない。水不足にならないのか心配したが、チャオプラヤ川という大きな川があるからか、3 年間水不足で困ることはなかった。また、近年は乾季に入ると、大気汚染が問題になることがあった。隣のビルも霞んでしまう空気の中で、人間が健康に住める環境がいかに大切かを考えさせられた。

２　バンコク日本人学校はこんなところ

バンコク日本人学校の最大の特徴は何と言ってもその規模の大きさである。小学部児童数は約 2,100 人、中学部生徒数は約 500 人、合わせて 2,600 人を超える世界最大の日本人学校である。小学 1 年生は 14 学級あり、全職員は 200 人を超え、職員室は 3 つに

分かれている。児童生徒の約 95%はバスで通学するが、そのバスの数は大小合わせておよそ 180 台もある。

児童生徒数が多いことによる最も大きな影響は、何事にも時間がかかるということだ。事前の綿密な打ち合わせと時間厳守が重要であるということを痛切に感じた。例えば、下校は各教室の出発時刻が分刻みで決まっている。下校バスは、全員が所定のバスに乗り込んだことを確認してから出発するので、1 人でも乗り遅れるとバスは発車できない。1 クラスの遅刻が 2,000 人を越える子供たちに影響を与えてしまうのだ。

このように、バンコク日本人学校は超大規模校ならではのルールややり方がたくさんある学校と言える。実際に各行事を実施するためには、多くの手間がかかり苦労も多かった。だが、その分成功したときの喜びや充実感も大きいし、多人数での合唱や運動会は迫力満点であった。

音楽朝会

小学部運動会

3　バンコク日本人学校の特色ある活動

①　交流学習会について

どの学年も年に一度、タイの現地校と交流会を行う。一緒に折り紙を折ったり、玉入れをしたり、盆踊りやタイダンスをしたり･･･。それぞれの学年でアイデアを凝らして交流を深めている。その際の言語は、基本的にはタイの子供たちはタイ語で、日本人の子供たちは日本語で話すことが多い。そのため十分なコミュニケーションをとることは難しかった。しかし、だからこそ言葉を超えて交流できることのすばらしさを実感することもできた。特に低学年は、言葉を介さずとも急速に人との距離を縮めることができる。この時期に様々な人と交流することの大切さを強く感じた。また、高学年では英語でコミュニケーションをとる場面が年々増えてきた。これからの英語教育の重要性を強く感じることができた。

ひも飾りづくり

タイのダンス

玉入れ　　書道パフォーマンス

交流会の児童の感想（3 年生）

タイの学校とバンコク日本人学校では人数に違いがあるけど、どちらの学校も同じで、協力することが大切だなと分かりました。なぜかというと、スポーツ交流の玉入れで、結果発表の時、ぼくたちが２位で一緒に喜んでくれてとてもうれしかったからです。これからもタイの友達と協力したり、親交を深めたりしていきたいです。
言葉は違うけど、一生懸命説明すれば少しでも通じることが分かりました。自分で言ったタイ語が通じてうれしかったです。かぶとを教えるときは緊張したけど、言ったら分かってくれたのでほっとしました。タイの友達と会話して少し仲良くなれました。これからもタイの友達をたくさん作って仲良くなりたいと思いました。
私は「タイの子どもはやさしいな。」と思いました。なぜかというと、ひもの飾りを作る時、分かりやすく教えてくれたし、かぶとの説明をする時、静かに聞いてくれたからです。いろいろな活動を通して、たくさん話をしたし楽しく遊べて、仲良くなれました。お別れの時、また、会いたい気持ちがあふれ、少し涙ぐんでしまいました。

②　小学部 3 年の総合的な学習の時間「バンコク調べ隊」について

各学年が総合的な学習の時間を活用してそれぞれ特徴的な取組を行っている。その中から一番関わりの深かった小学校 3 年生の「バンコク調べ隊」を紹介する。

「バンコク調べ隊」では、タイの果物や乗り物、観光地、祭り、料理など、子供たちが自分たちでテーマを決めて、タイやバンコクのことについて調べる。日本のように校外調査に出かけたり、インタビューしたりすることは難しいので、保護者の方に協力していただくこともあった。自分が見たり、食べたり、乗ったりした感想を交えながら調べたことをまとめ、最後はその内容を参観日で発表した。

タイ料理を作ろう

タクシーの乗り方の劇

屋台で使うタイ語教室

③　夏季職員研修での実践について

毎年、夏季休業に地方の現地校へ行って授業をする機会がある。年によって、タイの東北部や南部といったように行き先が変わるため、様々な学校を見ることができた。どの学校もバンコクからは遠く離れていて、交流学習会で出会うバンコク都内の子供たちとはずいぶんと雰囲気が違っている。ある学校の子供たちはみんな靴下に穴が空いていたし、またある学校では、みんな床に座って勉強していた。しかし、どの学校の子供たちも、私たち日本人を大歓迎で迎えてくれ、笑顔がとてもすてきだった。実際には、わずか数時間しか滞在できなかったが、忘れられない体験となった。

これらの学校では英語は通じない。タイ語での会話が必要になるが、私はタイ語も話せないので、コミュニケーションをとるのがとても難しかった。それでも授業をしなくてはならず、言葉を使わなくても授業ができるようにあの手この手を考えた。また、物が不足している学校も多く、全ての物をこちらの持ち込みで授業する必要もあった。言葉は通じないし、限られた物しかないので、授業作りにおいては知恵を絞った。その際に最も有効であったのはスマホやタブレットであった。子供たちと相撲をとる前には、タブレットで日本の力士が相撲をとっている動画を見せた。けん玉やてるてる坊主を作るときには、動画と写真で手順を説明した。小さな学年の子でも理解できたし、みんな興味をもって取り組んでくれたと思う。授業はもちろんだが、その場の空気を吸い、ご飯を食べ、笑い、踊った体験は何事にも代えがたい体験となった。

とんとん相撲

玉入れの様子

紙コップけん玉作り

半被とうちわをもって記念撮影

シャボン玉

④　社会科副読本の改訂に関わって

派遣２年目に社会科副読本の改訂に関わった。主に３年生と４年生で使用するこの副読本は、日本のものと同じように「家や学校のまわり」、「工場やお店で働く人」、「くらしを支える仕事」などについてまとめられている。

実際に町へ取材に出掛け、インタビューをしたり、写真を撮ったりした。１冊の本を仕上げる仕事は想像以上に大変な作業であった。しかし、できあがったものはバンコク日本人学校ならではの内容で、今後の学習に大いに活用できるものとなった。校内では、この取材を生かした研究授業を行い、充実した活動にすることができた。

副読本の改訂をきっかけにして、タイの街並みや文化、社会の仕組みをより深く知ることができた。

副読本の表紙

コムローイ

研究授業の板書

街の様子

交通警察コールセンター

⑤　チェンマイ補習授業校での授業実践について

バンコクから北へ約 720 キロに位置するタイ第２の都市チェンマイは、「北方のバラ」とも称される美しい古都である。そこに補習授業校があり、バンコク校から年２回教員を派遣して授業を行っている。補習授業校は、平

お昼ご飯

日は現地校やインター校に通っている日本国籍をもつ子供が、土曜日と日曜日に通ってくる学校である。教師も普段は別の仕事をしている方がほとんどである。

そんな補習授業校に私たちが行く理由は、チェンマイに暮らす日本の子供たちに学習を教えることはもちろん、授業を通じて補習授業校の先生方に指導法を学んでもらったり、先生方の悩みの相談にのったりすることも大きな役割であった。

低学年の様子

中学生の様子

教員としての経験を生かし、チェンマイの先生方や子供たちの役に立ちたいと思って意気込んで参加した研修であった。しかし、実際にはこちらが現状について学ぶ研修となった。補習校にいる子供たちの中には、日常生活をタイ語で過ごす子供も多く、日本語のレベルに大きな差がある。中学生でも日本語が十分に伝わらない子もいた。また、日本のような授業スタイルに慣れていない子も多い。椅子に座り、先生の話を聞いて、ノートをとるという日本型の授業スタイルも、身に付いていない子供にとってはストレスが大きく、授業が進められないこともあるそうだ。ここで暮らす子供たちは日本人であっても、これまでに出会ったどの子供たちとも違っていた。改めて、教育の役割や日本人らしさとは何であるか、海外に住む日本人の進路など、様々なことについて考えさせられた。そして、何よりも別の仕事をしながら、何年にもわたって授業を続けておられる先生方の姿に感動した。

4　さいごに

在外教育施設で働くことによって、本当に多くのことを経験することができた。これは国や学校は違っていても、派遣教員の誰もが感じていることだと思う。では、バンコク日本人学校ならではの経験とは何だろうか。私は「出会い」こそが最大の経験であったと思っている。世界最大級の学校には、本当にたくさんの教員、児童生徒、保護者、現地のスタッフがいた。年齢、経歴、性別、立場、出身地、国籍など、それぞれ違う人たちとの「出会い」は、私の視野を大きく広げてくれた。

これからも社会は変化を続け、人々の生活様式も価値観もますます多様になっていくと思われる。そして、そうした世の中を力強く歩んでいく子供たちを育てることが、今後の教育には求められるだろう。私も子供たちにとっての一つの「出会い」となれるよう、在外教育施設で経験したことを還元していきたい。